
IS 書きなぐられた一夏は

貴仁辺人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 書きなぐられた一夏は

【Nコード】

N5357Z

【作者名】

貴仁辺人

【あらすじ】

【感想にてタイトル募集中】織斑一夏。女性のみが扱えるはずのパワードスーツ、インフィニット・ストラトス 通称「IS」を操縦できる、世界でただ一人の男性。姉に、世界一の操縦者と謳われる織斑千冬をもつ。しかし、一夏の目標は決して彼女ではなく？ 原作と違う性格の一夏。目指す方向こそ違えど、信念は変わらない。これは、そんな彼の物語。 ある程度の3人称の練習も兼ねているので、気軽に指摘や評価いただけると嬉しいです。

1-1 クラスメイトは全員反論者（前書き）

この間まで、活動報告の方で書いていた二次創作。一夏性格改変ものとなっています。

おまけで書いているものなので亀更新、どう頑張っても同時更新不可能と判断した時点で、こちらは開示設定を「開示しない」に変更すると思います。

1-1 クラスメイトは全員反論者

これは、どうしたものか。

目の前で光る、名も知らぬISを見つめながら、織斑一夏はそう思った。

分かっている。これは仕掛けられたことなのだろう。でなければ、自分がISに触ったところで、反応するわけがない。仕掛人は恐らく、自分のよく知っている女性だ。それ以外に、この状況を作り出せる人間なんて思いつかない。

IS。インフィニット・ストラトス。宇宙進出を目的として作られた、いや造られた、女性のみが装着できるパワードスーツ。彼が今触って、そして起動させている物体は、そういうシロモノだ。そして、「女性のみが装着できる」という部分がミソである。

何を隠そう、彼こと織斑一夏は、男なのだ。過去に性転換手術を受けたわけでもない、完璧な染色体XYなのである。

男である自分が触ったときに反応するだなんて、ありえないのだ。

第一、前は反応しなかったのだから。

だったら、仕掛けなんてそれごと潰してしまえばいい。少なくとも、今の彼にはそれが可能だ。それも、容易に。

さあ と、一夏がISと向かい合いなにやら意気込んだところで、残念ながら自身への気合いの注入は無駄骨と化す。

それがなぜかと言えば、「その君！ ここは部外者以外立入り」といったように、背後から女性の声が聞こえたためだ。

よく考えれば、さっさとISから手を離していればよかったのではないか。

織斑一夏は自分の失念に今更後悔するも、背後で慌てて関係者と

連絡を取っている女性の声があまりに大きかったせいで、溜息は誰にも聞こえなかった。

とりあえず、今から事情聴取があるんだろうなあ。それならいっそ、このISに乗り込んで逃げ出してしまおうか。ぼんやりと彼が考えていた内容は、余りにも物騒で、しかもはた迷惑なものだった。

それから、IS学園の入学式直後までの間に、一夏が脳に記憶した情報はあまりなかった。

急遽入学が決定したIS学園で、勉強に最低限ついていくために必要な資料。殺人現場で鈍器になりえる分厚さのそのの中身と、後はIS学園で遭遇する可能性が低くはない人々の名前。彼が覚えたのは、大体それだけだ。第一に、ISの基礎知識など彼はほとんど知っていたため、ここ最近新たに開発された武装や理論の大雑把な内容程度しか、彼の頭の肥やしにはならなかったが。

強いて他に覚えたものがあるとすれば、今 教室、初のホームルーム、周りの生徒から向けられる強烈な視線からの不快感ぐらいであろう。とにかく、覚えたのベクトルが違う方向であることは、どうやら間違いない。

とはいえ、たかだかこの程度の不快感なら、彼はとっくに慣れていた。

たとえば、周囲の生徒が自分に集中しすぎているせいで、壇上に立つ緑の髪の小柄な教師が涙目になっていようと、彼は気にするそぶりも見せない。

そうして、やけに殺気立った空気の中、入学祝いの言葉は流れて行く。

その後で、自己紹介なるものが始まった。

早くクラス唯一の男子の番に回したのであるう、早い、早い、「織斑」より若い出席番号（名字が「あ、から、おりむよ、まで」で始まる生徒）達の自己紹介は、1人20秒取っているかすら怪し

いスピードで終わってしまう。

2分もしない間に、自己紹介のローテーションは一夏の番へと変わる。

全方位からの期待の眼差しを受けながら、副担任に呼ばれる前に、一夏は立ち上がった。

「織斑一夏です。2年からの志望は整備科、趣味は機械いじりと議論。得意なことは知り合い曰く勉強、苦手なことは球体型キーボードの操作です。あ、それと、机に突っ伏して寝てたりしたら大体は徹夜後なんで、授業中でも起こさないでいただけると助かります」

予定通りにスラスラと、一夏は自己紹介を終わらせた。カンニングペーパーでも用意していたのではないかとさえ思わせるほど、その説明は流暢で無感動。思わず、場の空気は一瞬静まり返った。

だからだろう。

可能な限り自身のことを丁寧に教えたはずの彼は、突如飛来した出席簿による強烈な一撃を、全く予想することができなかったのだ。教室中に、パンツッ！と大きく音が響く。続けて一夏の頭と机のぶつかるゴツという音が響き、女子達から多少の悲鳴があがった。しかしけろりと一夏は起き上がり、まるで起き上がることを知っていたかのように、攻撃主 織斑千冬は、そのまま言葉を続けた。

「授業中に居眠りする予定を今から作っておくだ？ いいご身分だな」

一夏が振り向くと、そこには自身の姉 織斑千冬が、いた。

「やだなあ織斑先生、言葉のあやですよ。第一、授業中に寝るぐらいいなら、PCの中身を整理でもしますって」

「授業を受ける、授業を」

瞳を閉じて、首を左右に振る千冬。だがしかし、生徒一同の興味は別の部分へ注がれた。

「ちよつと待って、2人とも、名字は織斑？」

「つてことはまさか、2人は家族か、それとも親戚！？」

「真相はどうなの、織斑君！」

当の一夏は目を見開いていた。

自分の名前は既に何度もニュースで流れていたし、姉も世界的な有名人。名字の一致など、とつくの昔に判明していたもの、と、彼はそう考えていたのだ。

「いかにも、織斑先生は俺の姉だよ」と、当たり前のように彼は返事をした。

そうして、彼を二回目の不意打ちが襲う。こちらは一夏には予想外であったが　大歓声が、否応なしに彼の耳を覆ったのだ。

慌てて耳を塞ぐも、どうやら被ダメージを防ぐことはできなかったらしい。頭に、金属音のような余韻が響く。

「五月蠅いぞ、静かにしろ！」

こういった状況には慣れていたのでだろう、千冬は特別身構えるでもなく、教室中に響く声でそう言った。

威圧感を感じたのか、歓声は一瞬でやむ。

「別に興味を持つなどは言わん。だが今はホームルームだ。そういう話は休憩時間にやれ！」

そりゃないよ。自分の身が売られたということに即座に気付いた一夏だったが、残念ながら声に出して反論することはできなかった。千冬の言葉で納得したのか黙った生徒達を前に、千冬はようやく仕事を　担任としての　を始めた。

1 番最初の休憩時間

当然のように、クラスメイトの女子達のほとんどが、一夏の元へ寄ってくる。

勿論浴びせられようとしたのは飽和しきれない量の質問だったのだろう。しかし彼は、それを「ちよつと待って」とジェスチャーで牽制した。

「実は、知り合いがうちのクラスにいるらしいんだ。出来れば、そ

つちと挨拶してからでいいかな？ 大丈夫、逃げ出したりはしないから」

そう言っつて、極めて紳士的に質問を止める。それから席を立ち上がって、クラス中を見回す。

目的の生徒は、すぐに見つかった。何せ目が合ったのだ。

ということは、あちらも自分を認識しているはず。半分の確信ともう半分の不安をもって、一夏はその知り合いに声をかけた。

「 篤、久しぶり」

「 ああ、久しぶりだな、一夏」

不意に、辺りの空気が静まる。それで一夏は、周囲がこちらを見つめていることに気付いた。

「 ここじゃなんだし、ちよつと廊下で話そうか」

篤の側も居心地はそこまで良くなかったのだろう。二つ返事で了解を得て、2人は廊下へ出ていった。

廊下に、人の姿は見当たらない。

ふつう、学校の廊下といえは休憩時間は行き交う生徒で騒然としているものだ。少なくとも、一夏の頭の中ではそういうものだと認識していた。その「ふつう」の考えからしてみれば、今の廊下は非常に静かだった。

ま、初日ならまだ友人も少ないだろうし、他のクラスは今頃中で親睦を深めているんだろう。そう考えると、今の自分達は妙に浮いている。

とはいえ、別に苦になるといったわけでもない。というか、一夏からしてみれば、男子である時点で自分は浮いているのだ。既に振り切つて浮いているのであれば、これ以上「普段なら浮いて見られるような行動」をしようと、大気を突き抜けるような浮上はしないだろう。

一通り周囲に気を配ると、一夏は知り合い 幼馴染の、篠ノ之 篤 の方に向き直つた。

「 いや、あの人繋がりがあるからここに入学するとは思つたけど、

同じクラスになるとは思ってたよ」

「まあ、な。それより、自己紹介も途中で切れたというのに、よく私だと分かったな？」

「当たり前じゃないか、そもそも篤、昔の姿をそのまま大きくしたように見えるよ」

特に、髪型とか。

長いポニーテールは彼女のトレードマーク、それが一夏の認識だった。

人が他人を見分けるとき、3割ほどの部分は髪型を重視するらしい。そこがそっくりで、更に纏う雰囲気も似ている。最後に会ったのは小学校の頃だが、一夏としては間違えようもなかった。

「あ、そうそう。剣道、全国優勝おめでとう」

「何故知っている!？」

「いや、どうしても何も……何せ全国、しかも優勝者は見目麗しい少女とくれば、いろんなメディアで取り上げられる」

「み、見目麗しい?」

あくまで一夏はあたりさわりのない世間的な評価を言ったまでだが、勿論篤はそんなことを知れるはずもない。

そして、一夏もそれを説明はしない。彼らの間に一つ、勘違いが生まれた瞬間だ。

最も、今のところは些細な勘違いである。

「さて、そろそろチャイムも鳴っちゃうから、教室に戻ろうか」

「う、うむ! そうだな、そうするとしよう!」

少なくとも、一夏にとっては、だが。

やけに上機嫌な篤に首を傾げつつ、一夏は教室へと戻っていった。学校中にチャイムが鳴り響いたのは、2人がちょうど自身の席に着席した直後だった。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した場合は、刑法によって罰せられ」

教科書の内容を、真耶はすらすらと読み上げていく。

確かこれは、5冊ほど支給された教科書のうち2番目に分厚い教科書の8ページ目に掲載されている内容だったはず。

一夏はと言えば、副担任の言葉を右から左に流しつつ、頬杖をついて欠伸を噛み殺していた。

法律に關与する部分は、ISの授業であろうとふつ々の公民の授業内容とそこまで変わりはない。そして内容も基礎の基礎だったので、ノートに文字を書き込む気すら、彼にはなかった。

「……織斑君、授業のノート取らなくて、大丈夫なの？」
不安げに、傍の席に座っている女子が一夏に尋ねる。

「ああ、うん。ここの内容は俺が初めてこれを勉強した3年前と一緒にだからね。大まかな内容は覚えてるし、ノートを提出しろって言われたら昔書いたやつをそのまま提出する」

遠回しだが、一夏はこの授業を受けている必要はないと宣言したので。自然、彼に話しかけた女子からは苦笑いが漏れる。

「あ、でも、山田先生の授業はかなり分かりやすいと思うな。教えるのがうまいっていうか、そんな感じ」

そして、再び一夏は欠伸を噛み殺す。

せめてノートを取っているポーズだけでも見せればいいのに、一夏はそれすらもしない。

どうも、その姿は真耶には、「お手上げ状態」であると映ったらしい。

「織斑君、ここまでで分からない所はありますか？」

とは言え、真耶も一夏を攻める気はなかった。

そもそも入学はかなり唐突に決定したことだし、彼は今までにISに関して触れることはなかった、と、そう思い込んでいたのだから、仕方ないことだ。

最も、彼の姉である織斑千冬に、一夏のことをちゃんと聞いていたのならば

「いえ、大丈夫です。この教科書だったら、一応全部覚えていきます」

「は、はい……そうですか、それならよかったです」

というような会話と、その後の気まずい沈黙は発生しえなかつただろうが。

「それならノートをとらんか、馬鹿者」

沈黙を破ったのは、教室の隅で待機していた千冬だった。

再び頬杖をついた一夏の背後に忍び寄り、強烈な出席簿アタックが炸裂する。

衝撃で、一夏の掛けていた眼鏡がずり落ちる。

「痛いです、織斑先生」

「お前が授業をサボタージユするからだ、馬鹿者。一度覚えた内容というのは分かっているが、お前はもう少し教師に敬意を払え」

眼鏡をかけ直しながら、渋々一夏はノートを取り出す。

別に、彼は持つてきていなかったわけではないのだ。ただ単純に、そのノートが授業用ではないだけで。

「織斑、眼鏡を外せ」

「え、織斑先生！？ それでは黒板が見えないのでは？」

真耶が不思議そうに尋ねる。千冬は、それに即答した。

「いや、この眼鏡橋は視力を矯正するものではないんだ。むしろ外の現象を無視するための装置、だな」

「？ ええっと、それはどういう」

「とにかく、眼鏡がなくても授業には何の問題もない」

「は、はあ……」

自身が眼鏡を掛けているせいだろうか、それでも真耶は納得が行かないようだ。

「織斑先生、本当に外さなきゃ駄目ですか？」

「当たり前だ、授業とは関係ないだろう」

「間接的には、関係ないってこともないですけど……」

すぱーん。小気味いい音が、またしても教室の静まった空気を支配する。

そう何度も何度も頭を楽器にされていてはたまらず、一夏はよう

やっと眼鏡を外した。

「それは預かっておこう、帰る前に渡す」

「精密機械なんだから壊さないでくださいね、『千冬姉さん』」
「分かっている」

『千冬姉さん』。呼び方を変えたということは、即ち教師生徒としてではなく姉弟として、学園での初めての会話だった。

言い換えれば、教師ではなく身内という、重要な願いだったということだ。

千冬は、現在ケースを持っていなかったので、仕方なくその眼鏡を自分で掛けた。

途端、少々のうめき声が千冬から洩れる。

「織斑先生、大丈夫ですか!？」

「問題ない。山田君、授業を続けてくれ」

うめき声が聞こえたには聞こえたが、千冬は特によろけるでもなく、再び教室の隅へ戻っていった。

「ええっと、どこまで話しましたっけ、確か」

そうして、再び真耶の声が教室に響くようになった。

2度目の休憩時間。今度こそ、一夏は女子達による膨大な質問攻めを捌くこととなった。

質問の内容は多種多様。「ISに乗れるのは、もしかして千冬の弟だからか」「ここに入学する前は、どこの高校を受ける予定だったのか」「千冬のプライベートはどういったものか」「男性IS操縦者として、立場をどう感じているか」「メールアドレスください」。

質問内容は真面目なものが半分、ふざけているとみて間違いないものが半分といった具合だ。

その1つ1つに、一夏は丁寧に返答してゆく。「いや、有名操縦者の親族が乗れるというなら自分以外も乗れるはずだ」「そもそも

入学はせず、倉持技研という研究所で働く予定だった」「言ったら殺されるので、ずばらすぎて部屋は魔窟と成り果てているだなんて絶対に言えない」「元々の予定よりお金が入る点はあるがたい」「アドレスは4つ持つてるけどどれがいい」。返答が的確なゆえにひとつの質問に裂かれる時間が多くなる。

これは、次の休憩も質問攻めかな。一夏がそう思った、ちよつどその時だった。

「ちよつと、よろしくて？」

背後から声がかかる。質問の1つと受け取るには、多少不安なもので、一夏は数瞬だけ振り返ることを躊躇う。

しかし、ここでケンカ沙汰ということもないだろう。そう判断し、結局振り向くことにした。

彼の振り向いた先にいたのは、金髪の髪を持つ少女だった。

一夏はその姿に、多少心当たりがあった。

「ああ、ええつと……セシリアさん、だから……あ、もしかして、イギリス代表候補生のオルコットさん、かな？」

「あら、自己紹介はきちんと聞いてらしたのね？」

「調べれば、すぐに情報が出てきたからね。一応、同い年の代表候補生ぐらいは全員調べておいた。まさか、本当に同じクラスになるとは思わなかったけれど。専用機ブルー・ティアーズ、イグニッション・プランのティアーズモデルの一種、だったかな」

イグニッション・プラン。欧米連合の統合防衛計画。イギリスは参加国の1つであり、ティアーズモデルはまさきに実用化の目処が立ったモデルだ。少しばかり調べれば、情報は簡単に出てきた。

「やはり……男性だというのに、何故そこまでISに詳しいのですか？ 確か、先程の授業でも、既に内容を理解しているとおっしゃってましたわよね？」

しかし、「少しばかり調べれば」は、あくまで一夏感覚に過ぎない。一般人の思考からすれば、5冊分の教科書をいきなり渡されれば、他のことを調べている時間などないというのが常識なのだ。

「いやほら、渡された教科書のうちいくつかは、既に知ってる内容だったからさ。本来そこに使ってた時間を予習に使ったんだ」

「なるほど、そういうことでしたか……しかし、男性である貴方が、何故ISの知識を元から蓄えていたのですか？」

「男だから女だからって差別する必要、ないんじゃないかな？ ISに乗れるのが女性ってだけで、別にIS関係者を女性固めする必要はないし」

一夏としてはごく自然に出た言葉だったが、しかし、周囲の生徒はおかしく感じたようだ。

「しかし、乗れるのが女性である以上、中心人物は女性であってしかなるべきなのではないですか？」

内心一夏は少しだけ面倒臭さを感じる。

ISに女性しか乗れないことが発覚してから、急激に広まった女尊男卑。ともすれば街中で男性が女性に小間使いのように扱われるこの社会では、あくまで女性主義という考え方をする人間がかなり多い。

そして、世界最強のIS搭乗者でありながら別に男女差別を行わない姉を持つ一夏は、その女尊男卑の社会的な流れとは相いれぬようなきらいがあった。

「乗るのは確かに女性さ。けれど、それには優秀な技術者と研究員がいてこそだ。詰まるところ、ISに乗れる以外に男性と女性が差別されるべき部分は、何一つない。少し言葉が悪くなるけれど、セシリアさんは極端に考えすぎだよ」

確かに、それは正論だった。

ISに乗れる女性がいる、それだから女性が優遇されている。しかし、それに便乗して針小棒大に自分の権利を語る女性も多々いる。だが、男性には不可能な国家貢献をする可能性がある女性とそうでない女性をより分けることは不可能であり、セシリアの女性優遇主義もまた真理のひとつだ。

自身の持つ正論をチャンバラさせてもお互いの争いを加速するだ

けである。が、しかし、今この場において主流なのは、明らかに女性優遇主義だった。

「織斑君って、変わった考え方するんだね」

「あ、でも、私、自分なりの考え方を持つてる人って好きだなあ」
そんな声が周りから聞こえる。

セシリアからしてみれば、予想外な展開であった。

そもそも、彼女は「ISを操縦できる唯一の男性」がどのような人物であるか、それを確かめようと声をかけたに過ぎない。

自分の求めていた知性のかけらは見ることができたとはいえ、周囲は自分と同じ考え方を持った人間ばかり。

自分の考えが間違っているのではない、という後押しを受けているが、逆に自分からは引き下がれない。彼女を襲っているのはそういう状況だった。

「まあ、自分の考えかたというより、かなりの男性の代弁でもあると思うけど。そもそもこの意見は去年小論文コンクールに出したものだし、一応自信はあったけど賞与はなかったから、やっぱり女性には優遇されて然るべきっていうのが社会の考え方と見て間違いない、かな」

自分に味方はいないことを察したのだろう、一夏はすぐに引き下がった。

退くことができなかったセシリアにとって、相手の退陣は願った
り叶ったりだ。

だった、のだが。

「逃げるのですか？」

腑に落ちない様子で、セシリアは着席しようとする一夏に言葉を
投げかけた。

びくりと一夏が反応したことを確認し、セシリアは更に続ける。

「まだ、わたくしは貴方の意見を聞き終わっていないのに」

一夏は、初めてむっとした表情になった。

「逃げるんじゃない。今から話すのは、時間が足りなさすぎる」

時間？ セシリアは時計を確認してみるが、まだ休憩時間は4分ほど残っている。

2人とも、既に次の授業の準備は終わらせてあるようだった。多少引き伸ばす時間ぐらいいは、あるのではないか。

しかし一夏は、小さく首を横に振る。

「予め話す相手が誰だか分かってるなら、一番適切な言葉を吟味した上で話すこともできたんだろうけど。生憎俺は、言葉選びは苦手なんだよね、昔から。それに、こっちは、織斑先生が出席簿で止めてくれるだろうけど、昔から、俺は言い争いだと熱くなりすぎるんだ」

言うだけ言って、今度こそ一夏は着席した。

なにやら不完全燃焼な感情を残しながらも、少なくとも彼に対して失望するのはまだ早い、ということだけは理解できたため、仕方なく自分の席へと戻、

「言い忘れてた！」

ろうとした時、急に一夏が起立した。

「セシリアさん、お願いがあるんだけど！」

その、先程までとはあまりにも違うテンションに、思わずセシリアもたじろぐ。

「な、なんでしよう……？」

自然、狼狽した言い方で返事をするセシリア。

そして次の一夏が放った言葉はいえば、彼女を更に混乱させるには十分すぎるものだった。

「ちょっと、付き合っただけ欲しいんだ」

1 - 2 信念通しは優柔不断

「いきなり何を言っているんだ、お前はあつ!?!」

啞然とするセシリアを置いてきぼりにして、そう大声の反論をしたのは箒だ。

「へ? 俺なんか、まずいこと言ったか?」

「まずい以前のっ! 問題だろうがっ! 何、白昼堂々告白してるんだ、お前は!」

「告白?」

きよとん、と首を傾げる一夏。嘘偽りなく、真剣に何のことかわかり兼ねているらしい。

箒は怒鳴り声で続ける。

「さっきの発言のどこが告白じゃないと言っただ!?!」

「……?」

あまりにも、一夏と箒の温度差は違った。

正確に言えば、一夏及びセシリアと、周囲の女子全ての温度差が違っ。

(一夏は箒の言っていることに、セシリアは突然の告白に、という違いこそあるけれども) 状況が飲み込めない2人に対し、箒は怒鳴りそのほかの女子達はわいのわいのと盛り上がっている。

そして、このあまりの落差に裏があることに気付いたのは、今の所最も冷静な一夏だった。

箒からセシリアに向き直り、一夏は尋ねる。

「なあ、セシリアさん」

機械じみた動きでセシリアはどうか動きだし、それから数秒時間置き、ようやく「なんですの?」と、出来るだけ平静を保った声で答えた。

「さっき俺が言ったこと、セシリアさんはどう受け取った?」

微弱な電気に打たれたように、セシリアの身体が跳ねた。

あまりにも直球過ぎる。いや確かに、自分の容姿に自信がないというわけではない。不健康そうであったり、見た目が醜かったりしては家の名が落ちると、ISに関しての実力のみでなく姿に関しても努力はしてきたつもりだ。一応、ナンパだとかの類ではなく、正式にお付き合いをと告白されたことも何度かはある。それでも、ここまで単刀直入に言われたのは初めてではないか。このような内容を頭の中で5秒に10回ほどは反芻し、それで彼女はようやく、当たり前障りのない答えへとたどり着いた。

「ええと、その、お気持ち嬉しいのですが、ほら、あー、わたくしと貴方は、今日初めて出会ったわけですし、ですから」

セシリアのその返事を聞いて、一夏はようやくと確信を持った。

「分かった。うん、ごめん、確かに付き合っって言葉は、そのまま言えば告白の意味になったかもしれないや。謝る、決してそういう意味で付き合っって言ったわけじゃない。ただ単純に、『本の知識程度でなら理解してるつもりだけど、機動に関しては素人だから練習に付き合っってくれ』っていう意味で言っただけで」

「だったら、省略せず最初からそう言わんかあ　っ！」

箒が、一夏に後ろから思いきり突っ込む。サンドバッグよろしく箒の攻撃を受け流すことなく喰らい、一夏は危うく意識を刈り取られかけた。

「いや待て箒！　付き合うの意味といえば『行動を共にする』だろ！？　そもそも俺はさっきまでセシリアさんと何の関係もなかったんだぞ！　人の内面も見ないで好きになっただまるか！」

「今度国語辞典を調べてみる！　第一項目に『交際』と出てくるわ！　確か小学校の時も主語を省くなと何度も言ったよな！？　私は確かに言ったぞ！」

「いや、家にいる時千冬姉さん相手には大体通じたから、つい癖で」といつか、意味が2つある単語でどちらか分からないなら聞けばいいだろ！」

「ならば試してみようではないか、ちょっと付き合え！」

「何に？ 買い物か？」

「このっ……お前も聞いていないではないかっ！」

「ええ、だって箒が恋愛という意味で付き合ってくれなんてこんな場所でグハッ　　！」

再び箒の一撃を喰らい、一夏はその場に崩れ落ちる。

周囲の生徒が「なーんだ、つまんないの」「あーあ、折角本のネタになると思ったのに」などと口々に言いながら退散して行く中、セシリアは理解した。

織斑一夏は、あらゆる意味で今まで見てきた男性とは別人である、と

「それではこの時間は　ん、織斑はどうした？」

千冬が初めて教鞭を振るうことになったその時間の、彼女の第一声はそれであった。

おずおずと箒が手を挙げる。

「篠ノ之か、あいつはどこにいる？」

「……その床で、のびてます」

あまりにも予想外の返事が来て、思わず一瞬呆れ顔になる千冬。

ここで先程一夏から没収した眼鏡を掛けていれば更に貴重なシーンとなり得たが、どうやらその眼鏡は現在、真耶が所持しているようだった。

「誰がやったんだ？」

「……私が、さっきの休憩時間に。ちょっと、いざこざで……」

一夏の起こすいざこざとあって、千冬はある程度その内容は予測できた。

どうせ、言葉足らずと朴念仁が原因だろう。細かい内容まで言い当てることは不可能だったが、原因はぴたりの中だ。

千冬はセシリアの机と一夏の机の中間点辺りで寝そべっている一夏に近付き、そして彼を軽く持ち上げた。

そして、本人の席まで楽々と運び、すっとと着席させる。

「ん……あれ？ 織斑先生」

「相手の身体能力が高いとは言え、女子の急所狙いでもない攻撃で気絶してどうするんだ、お前は」

着席時の衝撃で、一夏は目を覚ました。

「そこは箒の身体能力の高さを褒めるべきところであって、決して被害者を叱責する場面じゃないと俺は思うんですちよっと待ってください出席簿を振り上げてどうするつもりですか織斑先生！？」

「それ以上屁理屈を言うようなら、これをこのまま振り下ろす」

自身の姉の攻撃力を知っているが故に、そして更に自身の防御力の低さも知っているがために、一夏は黙らざるをえなかった。

分かりやすい実力格差を振り撒きつつ、千冬は教卓へと戻る。

「さて、今度こそ授業を始めるが その前に、ひとつ決めなければならぬことがある。織斑、何だその手は」

「俺以外、全員推薦します」

クラスのほとんどが、一夏の提案が何のことが理解しかねて首を傾げる。

「名前すら言えないのであれば却下だ。さて、決めなければならぬことだが、織斑、たとえ名前が言えたからといって、理由もなしの推薦は却下だ」

再び挙手した一夏を、千冬は呆れ顔で眺める。

一夏は急にきりっとした顔付きになると、同時に反論を開始した。「理由ならあります」

「何？」

「俺が受けたくないからです先生すぐ肉体と会話しようとするのはやめるべきだと思っんですがっ!？」

今回は、一夏の制止も効かず、というか聞かずに千冬の出席簿は振り下ろされた。

角部分と頭が勢いよく激突する、痛烈な音がクラス内に響く。

「で、まともな理由で推薦できる人間はいるのか？」

「つつ……まあ、2人ぐらいは」

なら言ってみろ、と言いかけ、千冬は視界に慌てている真耶を捉えた。

どうやら姉弟で話しすぎていた、ということに気付き、弟の話の続きを無視して自身のすべき話を開始する。

「さて、それではだが。今から、クラス代表を決めてもらう」

一夏が手を挙げる。千冬は無視した。

「その名の通り、クラスの代表となり様々な行事で先頭に立つてもらうことになる。聞こえはいいが、総括して言えば雑用だな」

クラス女子達の間で、空気が冷え込んだ。一夏以外は全員女子なので、平たく言えばクラス全体の空気が冷え込んだ。

一夏の右手は天井と垂直になるまで綺麗に伸ばされたが、これも千冬は無視することにした。

「さて、それではこの時間の間に決定してもらうぞ。自薦他薦は問わない、意見がある奴は手を挙げる。織斑」

「はい、それじゃあ箒とセシリアさんを推薦で」

千冬があからさまに目を細めた。

「理由を言ってみろ」

「セシリアさんに関しては、言わずもがな代表候補生でリーダーシップを執るのに相応しいと思うためですね。箒に関しては、まあ武術のたしなみがあるので、雑用や威圧に向いているかと……」

今回は正当な理由がついているため、千冬には反論することができない。

さて、それではどうするか。彼女が考え始めようとした時、箒が思いきり立ち上がり反論した。

「ちよつと待て！ それは暗に私を体力馬鹿と言っているのではないか！？」

「馬鹿とは言っていない。ただ体力がほかに比べて特出していると

「うただけだぞ」

被害妄想とは悲しいね、と一夏が首を横に振る。

「それなら、織斑先生！ 私は、私は一夏を推薦します！ 広告塔としての役目は十分ですし、こいつはデスクワーク関係の雑用なら非常に優れています！」

箒に続け、周囲の女子も次々と「わたしも織斑君かな」「じゃあ、あたしも同じく」「一夏を推薦してゆく。

しばらくして、2度ほど千冬が手を叩く。教室はそれで静かになった。

「さて、他はいないか？ いないのであれば織斑、篠ノ之、オルコットの3人で決めてもらうことになるが」

誰も声は出さなかった。

元より、クラスのほとんどの女子は一夏を他薦する方向で確定している。

一夏も、最初から自分が選ばれることは（クラスメイトの女子の嗜好きを見て）確信していたので、とりあえず他人を候補に挙げる事ができて満足だった。この男は、適当な理由をつけて他の立候補に役目をなすりつけようという、実に極悪非道で後ろ向きな考えをしていた。

唯一最初から自薦する予定だったセシリアとしても、実力としては最も高い自身がクラスメイトの大多数に選ばれなかったことに多少の不満は持っていたとはいえ、一夏について多少（少なくとも、頭の回転の早さ程度）は認めないわけにはいかなかったため、とりあえず声を荒げて推薦の内容に反対はしていない。

唯一不満を持っているのは、多分捨て駒として扱われたということを理解している、箒程度だった。その箒も、受理されてしまったからでは反論のしようもない。

「さて、ではこの3人の中から選ぶこととしよう。決定方法は

そうだな、多数決では結果が目に見えているので IS学園らしく、模擬戦、という形を採るぞ」

模擬戦、という言葉聞き、一夏は内心思い切りにやけた。

この決定方法であれば、自分は問題なく「自然な辞退」をすることが可能である。

うまい具合に転がってくれたものだ。しかし、その一夏の考えは、千冬の次ぐ言葉であつさり打ち砕かれることとなる。

「ちなみに、当然のことだが、辞退したいがために手を抜くなよ。私が手加減していると判断した場合、クラス代表の数倍の仕事を与えてやるから、そう思え」

威勢よく返事したのはセシリアのみである。筈は諦めたような雰囲気、一夏は冷蔵庫のプリンがなくなつたかのようなシヨックの表情をあらわにしていた。

してやったり。千冬的心情を表すと、おおよそそんな具合であつたろう。一夏の考えは見事に看破されていたのだ。

「織斑先生」

負けじと一夏が挙手する。

「何だ、織斑」

「他薦された人間より自薦する気概のある人間のほうが円滑にことが進むと思うのですが！」

「黙れ。そもそも全員他薦だ」

「いえ、ですけど！ セシリアさんは、最初から自薦する気はあつたかと思えます！」

「残念ながら、今からそれを確認する方法はないな」

一夏からさつと血の気が退いた。

墓穴を掘っていたのだ。セシリアを自分が推薦しなければ、少なくとももう少し食い下がることは可能だった、その結論に至つてしまったのである。

「では、試合は一週間後とする。各自準備を整えておくように。さて、授業を開始するぞ」

IS武装の基本的な知識を話し始める千冬だったが、既に知っている内容の上に放心状態である今の一夏には、それを聞くだけの気

力は残っていなかった。

そして、時は昼食時間となる。

女子達のコミュニケーション能力は非常に高いもので、既にクラス内ではいくつかのグループが出来ていた。

片手で数えられるような回数 of 休憩時間の数、しかもそのうち1度は自分のところに来ていたはずなのに、どうしてももうグループが出来上がってるんだ？ そんなことを考えつつ、一夏は他のほとんどのグループの誘いを蹴り、学食でひとり食事をしていた。

最も、食堂であるために1組（一夏の在籍するクラスである）以外の生徒が大量に押しかけて来る、半パニック状態を気にしなければ、という前提の「ひとり」ではあるが。

このようなことがないように等に同席を頼んだのだが、彼女にはにべもなく断られてしまったのだ。

初日から悪印象を持たれるわけにもいかず、ある程度話を聞き取りながら、一夏は口の中が空になったときに質問のいくつかに回答する。「ながら食い」という言葉があるが、この場合答えながら食い、である。

最も、おおまかな質問の傾向は大体一致していたので、一夏としては特別心労の溜まるものではなかったのだが、ちょうど味噌汁の半分を啜り終わったところで、空気が変わった。

「同席してもよろしくて？」

聞き覚えのある声があった方向を、一夏の視線が捉える。そこにはお盆を持ったセシリアがいた。視線の高さの関係で、料理が何かまではわからない。

「ん、別に大丈夫。特にセシリアさんには相談したいこともあるし反対側の席へと座るよう促すと、他の女子を掻き分けるようにセシリアは机に近づき、着席した。

自然、それまで同席を断られていた他の生徒たちは面白くなさそうな顔になるが、一夏はとりあえず「知り合いなので、すいません」

という理由で突き通すことにした。

そして、一夏の視線が真剣見を帯びたものに変わりながらセシリアの方向を向いたので、ようやく女子達も各々散らばって行った。

周囲の女子がいなくなったと同時に、一夏が軽く吹き出す。

「？ どうなさったのですか？」

「いや、ぞつとしないなあって。噂好きな女子のことだから、どうせオルコットさんと俺が今日初めて知り合っただってことも知ってるんだろうな、と思ってたからさ。この後どうという言葉で追い払おうって考えてたら、予想外に皆あっさり引いちゃっただろ？」

「……まさか、わたくしをダシにした、ということでは」「バレた？」

間髪入れずに返されて、セシリアは多少へそを曲げた。体よく利用されたというのは、あまり気分のいいものではない。

見れば一夏の真剣見を帯びていたように見えた視線、そして雰囲気は、既に跡形もなく消え去っていた。

切り替えが早いのか、単純に悪戯が好きだけか。悩んでいると一夏が問い掛けてくる。

「それで、用事って何だ？ 日替わりパスタのタリアテツレなんて持ってるんだから、昼食を相談したいわけじゃないだろ？」

小さくひとつ咳ばらいをして、セシリアは無駄な思考を省いた。

「ええっと、2つの用事がありますが、時間がないのでとりあえず片方だけでよろしいでしょうか？」

「うん 女尊男卑の話題を聞かせる、かな？ それとも、付き合っ話への正式なお断り？」

「……断ると、もう分かっていたのですね」

珍しく、セシリアが申し訳なさそうに縮こまった。

「そりゃあ、仕方ないでしょ。まさか俺も、一週間後にいきなり、教えを乞った相手と対戦することになるとは思ってたよ。セシリアとしてもここで代表候補生としてアピールしておかなきゃいけないわけだから、結論は『無理』になるよな」

既に全てが見透かされていたことに、セシリアは啞然とする。初めて会話をした時に要領のいい人間だとは理解したが、まさかここまでとは考えていなかったらしい。

「それじゃあ 模擬戦が終わった後で、もう一回お願いしてもいいかな」

「ええ、それであれば多分！」

その答えで納得したらしく、一夏は一度頷いた。

「それじゃあ、とりあえず1人でどこまでできるか試してみるよ」
それで話はずいた、と一夏は判断し席を立つたが、しかしセシリアは1つ納得がいかないことがあり、一夏を呼び止めた。

「何？」

「いえ、確かクラス代表になることには乗り気ではなかったのに、やけに張り切っているように見えたので……」

一夏は振り返る。そして、当然のようにこう言った。

「セシリアさんが自分の実力にあぐらをかいているようであれば、手抜きでもいいかなとは思ったけどね 本気の相手に本気で答えがないなんて、恥ずかしいだろ？」

今度こそ、一夏は去ってゆく。

その後ろ姿に見とれていたことをセシリアが認識したのは、一夏の姿が完全に見えなくなっただけだった。

「……不思議な、方ですわね」

悪い意味でも、良い意味でも。

セシリアが一夏の評価を書き換えていた頃。

篠ノ之箒は、クラスで頭を抱えていた。

（せっかく一夏が昼食に誘ってくれたのに、なぜ蹴った!? またとない機会であったというのに!）

抱えた頭の中で彼女が考えていたことといえば、このようなこと

の際限ないループである。

広げてある弁当には一切口が付けられておらず、ともすれば何か病に罹っているのではないかと周囲が心配してしまうほどであった。

ある意味、箒の意思と反した行動というのは、長年治らない病のひとつと言えなくもない。

「どうしたんだ、箒？ 弁当があまりにまずかったとかか？」

ふと声が出た方向を見ると、そこには一夏がいた。時計を見れば、既に休憩時間に入ってから20分以上は経過している。既に昼食は食べ終わっているのだろう。

「ちよつと失礼 ん、別にまずくないじゃないか」

そのぐらいいは、箒も分かっていた。味見ぐらいしたのだ、まずいわけがない。一夏が食べようと味覚が変でなければ あれ？

彼女は、気付いた。

「一夏」

「ん、何だ？」

「その……私の弁当、食べたのか？」

「ああ、ちよつとその肉団子を。肉団子って言っても、半分ぐらいが野菜で作られてんのかな、これ？ 結構美味いぞ？」

先ほどまで落ち込みの台詞がループしていた頭に、今度は「美味しい」という台詞がループする。

「本当か？」

「嘘なら、今頃歪んだ顔してるよ」

箒が顔をあげる。

一夏は苦々しい顔をしていた。

「まずいのではないか！」

「いや、冗談冗談」

顔を戻して、それからからからと、愉快そうに一夏は笑った。

「そうそう、用事があるんだった。なんか、放課後に俺が眼鏡返してもらった時、箒も一緒に来いだったさ」

「眼鏡を返してもらった時に？ なぜ私呼び出されるんだ」
「さあ、知らない。うちの姉上様々は、お人遣いが荒いからな」

1 - 3 あの方は、幼馴染の位置を獲得しました

そして、数時間後。

箒は、立ち尽くしていた。

場所は教室ではなく、職員室の前。不審に感じた数名の教師が話しかけるも一切反応を見せず、既に匙を投げられた状態である。

発端は、数十分前に遡る。

入学初日の授業　IS学園は国立高校、そのうえ講義内容も非

常に濃密であり、時間が惜しいと初日から授業が詰め込まれているがすべて終了し、一夏は自身の眼鏡を返してもらったために、箒はなぜだか一緒に呼ばれたために、2人は職員室へと来ていた。

「失礼しまーす、1年1組の織斑一夏ですが、織斑先生はいますかー？」

コン、コン、コン、コン、と、4回ノックをしながら、一夏は目的の人物を呼び出す。

10秒ほどで、千冬は現れた。

「来たな。篠ノ之も　よし、ちゃんというな」

「織斑先生、俺は分かりますが、なんで箒も一緒なんですか？」

「いや、2人ともに、ついでの用事があるからな。……おっと、その前に眼鏡を返しておくか」

千冬のスーツの胸ポケットから、一夏が数時間前まで掛けていた眼鏡が取り出される。

一夏はそれを受け取ると、レンズに傷がいつていないかを細かく確認し、自身の眼鏡ケースに入れた。

「掛けなくていいのか？」

箒が尋ねると、一夏は「ああ、箒は知らないんだっけ」と返し、それから眼鏡を再び取り出して、レンズの内側を箒に見せた。

「……む？　何だ、これは……？」

レンズの裏側には、大量の数字とアルファベットが映っている。アルファベットは、AからFまで。

「見ての通り、これは小型のディスプレイ。ほら、目を近づけるともう少し沢山字が見えてくると思うぜ」

一夏に促され、箒はレンズギリギリまで目を近づける。

すると、レンズは瞳に、膨大な量の文字列を焼き付けてきた。あまりの情報量に、思わずよろけそうになる箒を、一夏が支える。

「ごめん、慣れてないとそうなるよな。ともかく、こいつは一種の演算補助装置みたいなもんだよ。ちなみにくれた人は、まあ、箒の好いてない相手だけど……」

語尾が尻すぼみになる一夏の言葉で、箒は、この眼鏡を一夏にプレセントした人物が誰であるかを理解した。

しかし、箒がその人物との回想に入る前に、千冬が声を挟む。

「ともかく、授業で私が一夏からこれを取り上げた理由も、どこのつまり一夏が完璧に授業を無視するポーズを取っていたため、というわけだ。さて、では織斑、篠ノ之。今から呼んだ理由を説明するぞ」

千冬が、今度はシャツのポケットから何かを2つ取り出し、一夏と箒の両方に渡す。

2人とも受け取ってそれが何であるかを確認すると、どうやら鍵のようだった。

「ああ、そういえば、私は寮の鍵を貰っていませんでしたね。だから呼ばれた、と」

自分が呼ばれた理由を箒はやつと理解するが、織斑の名字を持つ2人は何やら渋い顔をしていた。

「それだけではないのだが……まあ、いいだろう。織斑、何か不都合でも？」

「織斑先生。俺は寮に入るのは一週間後と聞いていたので、貴重品の準備が一切できていません」

「生活必需品の類であれば、私が適当に漁って持ってきてある。着

替えと携帯の充電器ぐらいだが」

千冬が言い終わると、間髪入れずに一夏が「足りません」と言い返す。

「部屋のPCはまた今度の大型連休にでも持ってくるとして、少なくともノートPCがないと。ちよっと、今から取りに行つていいですか？」

溜息をついて、首を横に振る千冬。横の箒を差し置いて、一夏は更に言い返す。

「駄目なら、入れてある棚の鍵を渡すんで、織斑先生が取りに行つて下さい。人に渡さなきゃいけないデータが多少入ってるんです」

そして、ズボンのポケットに入れてあつた小さな鍵を、千冬に差し出す。

「急ぎ……ということとは、あいつ関係か」

「そうです。多分専用機が届くまで自衛手段がないからこそ、計画の前倒しですよ？ 本当なら、このぐらい予想して自分で持つてくるべきでした、ごめんなさい」

小さく、千冬が溜息を吐いた。

「仕方がない、元はと言えば大人の事情に無理矢理付き合わせた結果だ。全く、この年になつて高校生の使いっ走りになれるとは、な」
再び一夏が頭を下げ「ごめんなさい、よろしく願います」と言う。

差し出された鍵を先ほどまで寮の鍵が入っていた方のポケットに入れつつ、「さて、ではもう一つだな」と千冬は続ける。

ようやく自分の介入できる話になつたと感づき、一夏ではなく箒がそれに返事をした。

「部屋の番号 ですよね？」

「その通りだ。防犯の目的上、鍵番号は鍵と一緒に付けられないことになつているからな」

言いながら、最初から左でのひらに握っていたのであろう小さな紙を、一夏と箒のそれぞれに渡す。

「箒、一夏の順番で紙は受け渡された。広げた箒が、一夏に「お前は何号室だ?」と尋ねる。」

「ええと、5201号室かな?」

「箒が一夏の手元を覗き込むと、確かにその紙にはデジタル数字で「5201」と書かれていた。」

「しかし、千冬が指摘する。」

「逆さ向きだ。第一5201号室なぞうちの寮にはない」

「あ、そうなのか。よっと」

くるり、と180度、一夏は紙を回転させる。

「ふむ 1025号室、だつてさ。ちなみに、箒は何号室だ?」

「今度は一夏が箒に尋ねる。しかし、箒はなぜか硬直して動かない。」

「ん? どうしたんだよ、箒?」

「箒の手元で広げられた番号の書かれている紙を見ようと、一夏は箒の肩に手を掛け覗き込む。」

「ひゃ、ひゃわあっ!?!」

「おい、箒!? あぶ、うわ、どうした!」

「一夏が覗き込んだその瞬間、箒は過剰反応したかと思うと、思い切り一夏を吹き飛ばした。」

「どうにか転ばないようにバランスを取った一夏が再び箒を見ると、彼女は紙を今一度広げ、また完全に動きを止めていた。停めていた。」

「……うーん、なあ千冬姉さん、箒、これどうなってんだ?」

「それは 後で、分かるだろう。それより、私はもうノートPCを取りに行くぞ。棚は上から2段目だな?」

「ああ。一応1段目3段目もその鍵で開くけど。開けてもいいけど、中の紙を汚したりしないよね」

「分かっている」

最後に箒に何やら耳打ちすると 悪戯っぽい笑みを、微かに浮かべていた 、再び千冬は職員室へと入っていった。

「箒? 箒ちゃん、箒さん、篠ノ之さーん! ……駄目だな、反応しない」

言葉には反応しないで、紙を見ようとしたら握り潰される。どうしたのか……。千冬がいなくなった後も一夏は悩んでいたが、数分経つと諦めたようで、どうせ後少しすれば復活するだろう、という不確定な考えと共にその場を去った。

それから、数十分。箒が微動だにしなかったというのは、既に何人も教師が知る事実である。

箒が千冬に耳打ちされた言葉は「遅くても夏休み前には変わる、精々楽しむことだ」であり、箒の手元の紙に書かれた番号は「1025」。即ち一夏と同室であったが、その事実を現時点で知っている生徒は、もちろん箒のみであった。

さて、箒を置き去りにした一夏であるが、彼は今現在、指定された寮の自室にはいない。それどころか、1年生の教室に来ていた。

但し、1年生の教室と言っても、自身が籍を置いている1組ではない。彼が今来ているのは、1年4組であった。

当然、何の用もなしにこの教室に来たのではなく……目的を果たすため、一夏は現在、4組生徒のうち1人と会話していた。

「……本当に、この番号で間違いはない？」

「うん！ それにしても、どうしてあの人の部屋番号なんて？」

「知り合いなんだよ、確か初めて会ったのは6年前……だったかな？」

「とにかく、結構前ってことは確かだ。それじゃ、ありがとな！」

一夏の目的は、人捜しであった。

昔から様々な論文講演会やコンクールに参加している一夏は、その分交遊関係が広い。捜しているのは、その関係で知り合った人物である。

教室にまだ残っているのであれば好都合だったが、その相手は既に教室を後にしていた。故に、クラスに残っていた他の生徒を捕まえ、情報を聞き出していたわけである。

生憎、最初に捕まえた生徒は自身の番号しか覚えていなかったが、一夏とのコネを持ちたい（と言うより、単純に男子生徒に興味があ

る)その生徒は本日知り合った他の女子に又聞きで質問。何人かそれを繰り返して、結果として一夏が捜していた人物の部屋番号の特定に、いまさつき至ったのだ。

部屋番号を特定できた一夏は、その数分後には寮の、教えられた部屋の前まで来ていた。

最初にノックをするが、部屋の中から反応はない。

もう一度、今度は「おい」と呼び掛けながらノックする。やはり、反応はない。

もしかして、今は食堂にいるのか？ そんなことを考えつつ、一夏は部屋を離れようとする。

しかし、部屋の扉が開いたのは、一夏が食堂にむけて歩きだしたちようどその瞬間だった。

「誰……？」

声が聞こえて、一夏はすぐに振り返る。

今聞こえたのは、そっくりさんじゃなければ、確かに自分のよく知る人物なはず。果たして、扉のノブを握っていたのは、一夏の捜していた相手そのものだった。

髪は水色で内向き、そこまで長くない。一夏と似たような眼鏡を掛けており、瞳はどちらかと言えば垂れ目の部類に入るだろう。

「や。簪さん、久しぶり！」

「え……織斑くん？ あ、そっか……入学したんだから、そりゃあ、いるよね……」

名を、更識簪しんしきかん。小学校の頃には作文コンクールで、中学の時点では各地の大学の研究会や論文発表会で一夏と何度も顔を合わせている、彼の昔馴染みである。

「いることは知ってたから、初日のうちに挨拶しておきたくてさ」

「織斑くん……そういう所、本当にマメだよ……」

「後になって忘れるよりはいいだろ？ 日本のことわざでも、善は急げって言うじゃないか」

同じ学園にいる以上、会うことはいつでも出来るのだから、それ

ほど善というわけでもないのではないだろうか……？ 多少無理があるように思える一夏の考え方に、簪は少し微笑む。

「つつても、本当に挨拶だけなんだけどな。後2日入学式が遅ければ、香川にでも行っただけだ」

「別に私、うどんしか食べないわけじゃないよ……？」

「じゃあ、秋葉原にでも行けたんだけど」

「それは、土産物として、どうなのかな……？」

むむむ……と唸る一夏。最初は冗談を言うだけの予定であったのが、いつの間にやら真剣なおみやげ議論に変化していた。

「あれ……そういえば織斑くん、今日は眼鏡掛けてないんだね」

「ん？ あ、ああ。授業中には掛けてただけだけど、千冬姉さんに取りあげ喰らって、さっき返してもらったばっかなんだ。それから簪さんのこと捜してて、掛けるの忘れてた」

簪からの質問に返答しながら、一夏は眼鏡を掛けなおす。掛け終われば、そこにいたのは簪のよく知る風貌の一夏だった。

「うん……やっぱり、それ、掛けてないと不自然……」

「そうかな？ 用事がない限り、基本は外してるんだが……IS関係の研究会で会うことが多いから、そういう印象が強いのかな。むしろ、プライベートなのに簪さんが眼鏡を掛けてるってことの方が、俺としては驚きかな」

何気ない一夏の言葉だったが、急激に簪の顔が暗くなる。何か、地雷を踏んで閉まったのだろうか、一夏は大いに焦った。

「ごめん！ 触れちゃいけない所とか、だったか！？」

「違う……」首を振り、簪は即座に否定する。しかし、何やら事情があることは、例え他人の恋愛感情に疎い一夏だったとしてもすぐに察することが可能だった。

「じゃあどうしたんだよ？」

「それが、実はね……これ、見てくれる？」

ノートPCの画面を向けられ、内容を一夏が確認する。一通のメールだった。

「倉持技研……?」

その名前は、一夏もよく知っている。

一夏 正確には、千冬も含めてだが には、両親がいない。この歳まで一夏を育てたのは、紛れもなく千冬ただ一人の手によって、である。

その姉に負担を掛けるまいと、IS学園に入ることが確定するまでの一夏は、就職をする予定だった。その就職先こそ、今このメールアドレス欄に書かれている技術研究所、『倉持技研』なのだ。

最も、数年前から才能の片鱗を見せていた一夏は、就職する前から仕事の手伝いやバイト紛いのことをしており、一夏が初めてISを起動させたのも仕事の一環（受験に使われるISの整備中）で起きたことなのだが とにかく、一夏にとって倉持技研とは、それほど馴染みの深い所であった。

メール内容は長文でこそあるが、その内容は簡潔に1行で表すことができる。

即ち、

「『ちよつと急な事情が生まれたから、君の専用機ほっぽり出すことになっちゃった』……って、言われたってことか」

「うん……」

ようやく、一夏にも簪が眼鏡を掛けている理由が分かった。

簪は 本来、そんなことをする必要がないはずの彼女は、自分の手で未完成のISを作り上げるつもりなのだ。

しかし、次に一夏には、別の疑問が湧いた。

「事情つてのは何なんだ？」

「詳しいことは、まだ教えて貰ってない……」

おかしな話である。

まだ終わりにきっていないバイトの関係で、一夏と倉持技研は未だメールのやり取りを繰り返している。

しかも、一夏が受け持つことが多いのは、ほとんどIS関係の仕事。それだというのに、一夏の元にIS絡みの新たな話は一切聞こ

えてきていない。

「分かった、とりあえず、俺の方からも聞いてみる。何か、俺に手伝えることがあったら、何でも言ってくれよ」

「うん……ありがとう、ね」

1 - 4 言葉選びはすれ違いレベル

簷に自身が宛がわれた部屋の番号を伝えた一夏は、一応、初日のうちに済ませておきたかったことを全て終わらせたため、まだ見ぬ自室でゆっくり羽を伸ばすことにした。

本当であれば、今頃は帰路に就いていた……を通り越して、既に自宅に到着していたはずなのだ。自身のノートPCが使えないのは多少予定外でこそあるが、それ以外で時間配分が間違っているということもない。本来ゆっくり時間を取って行っていたはずの仕事を、多少急ピッチで進める。ただ、そのみである。

自室、1025号室は、いくらクラスが違うといえど同じ一年生の簷の部屋と、そこまでは離れていなかった。

とりあえず、相部屋である可能性を確認 常識を考えれば男子は一人部屋が妥当なのだが、自分の入学経緯は複雑であるので、一夏は安心していなかった するため、中に誰か人がいれば聞こえるであろうボリュームの声で呼びかけつつドアをノックした。

それから20秒ほど待つしてみるも、室内からの返事はない。どうやら、男である自分に振り分けられたのはちゃんと一人部屋だったらしい、と判断し、一夏は鍵穴に鍵を差し込み、入室した。

「へえ……流石は国立」

思わず口笛を吹いてしまうほど、内装は素晴らしいものだった。

多分弾力性に富んでいるであろう、2つの羽毛ベッド。カーテンにはシミのひとつもなく、多分宿題をするために備え付けられているのである。机はかなり横幅が広い。しかも、天然木材であるようだ。

移動してクローゼットを開けてみると、『流石は女子校の設備』と言わんばかりの収納量を誇っている。一般男性であれば、3人ぐ

らいが共用で使用しても問題なさそうである。

PCも備え付けてあり、学園側に監視されている可能性が非常に高いため仕事には使えないだろうが、それなりのスペックを誇る機種であることは間違いない。

シャワーが備え付けてあるのはもちろんのこと（浴槽が備え付けられていないことに、彼は多少がっかりはした。一夏は、かなりの風呂好きである）、洗面所のほうもすっかり水と湯を使い分けることができる。どのぐらいの時間で温度が変化するのか調べてみると15秒程度で水は湯に変化するらしい。

総じて、家賃の安いアパートメントの一室ぐらいは簡単に越す程度の質はあるだろう。と、ここまでが一夏の大体の判断である。

他にもポットで湯を沸かしたり、それで出来た緑茶を飲んだり、早速PCをつけたり、とにかく室内で様々なことを試しているとコンコンと、2度、部屋の扉が叩かれた。

「はい、どなたさまー？」

さくつとPCの電源を落とし 現時点、このPCは遊びで使っているだけで電源を落とす必要は一切ないのだが、平時においては機密情報を扱っている一夏の癖である、一夏は部屋のドアを開く。

ドアのむこうに立っていたのは、箒だった。

「箒、ドアの2回ノックはトイレに入る時の……んーと、その顔は、冗談は後にしろ、っていうことか？」

箒の2度ノックに補足して更に2度ノックを繰り返す動作をした一夏だが、箒がじろりと睨んできたために、追加ノックは1回で終わった。

道を開けて、中に箒を招く。

「それで、さっきはどうして急に固まったんだよ？ っと、それより、箒の部屋番号を聞いてくか」

一夏が話しかけるも、箒は返答をしない。あれだけやかましい自分の幼馴染はまさか、頭でも打ったのか？ 失礼極まりないことを

一夏が考えていると、箒が窓側のベッドに腰掛けた。

「……………」

やっとこさ箒が声を出したため、とりあえず一夏は、彼女が頭を打っていないことを確認した。やはり失礼極まりない。

「ここ？ ああ、うん、ここのベッドの寝心地は良さそうだよな」「そういうことじゃ、ない」

ん？ と、一夏が首を傾げる。箒の言わんとしていることが一体全体何なのか、どうやら分かりかねているらしい。

「ここ、なんだ」

「いや、ここなんでも何も、箒にはさつき部屋番号を伝えて」「ぶんぶんと、ポニーテールを大仰に揺らしながら箒は首を振る。

「じゃあ、何なんだよ？ 口を閉ざしたまんまなんて、箒らしくないぞ」

なおもしつこく尋ねる一夏を相手に、ようやく箒も決心がついたらしい。

小さな深呼吸をして、やっと言いたかった言葉を口に出した。

「私の部屋も、ここだ」

ほんの一瞬だけ、一夏は固まった。それから、「はあああああっ！？ マジかよ！」と、本日一番の大声を出して驚いた。

「ちよっと、その紙見せてみ！もしかしたら逆さ読みしてるだけで、実際のところは5201号室かもしれないから！」

「そんな号室ないと、千冬さんがさつき言っていただろうが！紛れもなく1025号室なんだ！」

「けど、俺と違って女子は、既に荷物が各自の部屋に届いてるはずなんだよな！？ 箒の荷物なんて、どこにも見当たらないぞ！？」

「少し手違いがあったらしく、宅配が遅れたそう。あと数分ほどで届くと、さつき聞いた」

こういう時に限ってタイミングは非常にいいもので、部屋のドア

が再びノックされる。

箒の話を一旦止めて一夏が扉を開くと、そこに立っていたのはクラス副担任の山田真耶だった。

「あ、織斑君ですか。篠ノ之さんはいますか？ いないのでしたら、荷物が届いたらしいので、事務のほうに取りに来てくれとのことだと伝えておいて下さい」

真耶は、『たとえ今いなかったとしても、後では必ず箒がこの部屋に来ること』を前提で話している。これはもう、一夏としては、確定宣告に近いものだ。

もちろん、ただ『知り合いらしい自分に言っておけば伝わるだろう』という算段で真耶が来た可能性も多少はあるが、そんな現実逃避がうまく行くとはい、流石の一夏も考えてはいなかった。

「話はそれだけです。それでは、失礼しますね」

結果、箒が嘘を吐いていないということが、大体証明されてしまったわけである。

箒の目の前まで戻って来ると一夏は出口側のベッドにぼふりと音を立てて座り込む。

「箒、荷物が事務所に」

「そのぐらい、聞こえている！」

「あー、うん。そうだよな……本当に、箒はこの部屋だったのか」「だから、さっきそう言っただろう！」

「いや、だってさ！ 恥ずかしいだろ！ ついさっきまで俺『こんな高級な部屋が1人で使えるのかこりやすげえやヒヤッフー』みたいなこと言ってたんだぜ！ 恥ずかしいだろ！ 恥ずかしいだろ！」

第一感想で「やっぱり、男なんだから1人部屋だよな」という勘違いから入り、そして「一人ヒヤッフー」である。現在の一夏は、顔にヤカンを乗せれば湯を沸かせるほどに赤面していた。

しかし、やはり言葉足らずの烙印を大勢の人間に 少なくとも、今日だけでクラスメイトの全員に 押される一夏。

箒は、一夏の言葉を勘違いして受け取ったらしい。

「……そうか。……そんなに、私と同室が嫌か」

「嫌っていうよりさ、予想外だろ、どう考えても。箒だつ、てまさか俺と同室とは、今日になるまで考えてはいなかっただろ？」

「……そういう建前は聞いていない。本音を言うのなら、1人と、私と同室、どっちの方がよかったんだと聞いている」

「そりゃまあ、やっぱり1人の方が楽か」

急な殺気に気付き、一夏は身構える。そして、非常に後悔した。

嘘でも、同室のほうが嬉しいと言っておけばよかったかもしれない。今更ながら、一夏はそう考えたのだ。しかし、言ってしまったからには、もちろんもう遅い。

目の前の少女が憤慨していることを、一夏は察知した。

「そうか……せっかく、私は決心して来た、というのに……一夏は、私と同室は嫌だ、と」

「あ、あのですね、箒さん？ 別に、嫌とはまだ……」

「折角、髪も分かりやすいようにしたし、……千冬さん、だって、ああ言ってくれた、のに……」

「もしもし、箒」

瞬間。

一夏の額に、思い切り掌底が叩き込まれた。

護身術の一環で箒が覚えたそれは、しかし剣道の全国大会優勝という実力を持つ彼女の身体能力の高さが原因で、一瞬にして一夏の意識を刈り取ることとなる。

ベッドに仰向けになって倒れ込む一夏、しかし、箒は彼に目もくれずに部屋を飛び出した。

彼女の瞳に溢れんばかりの涙が溜まっていたことを、一夏は見落としていた。

「……というわけで、幼馴染は俺を気絶させた上で、部屋を飛び出してしまったわけですよ」

「……………」

第の攻撃から3分ほどして起き上がった一夏は、女子のことは女子に聞くべきであろうと考え、助けを乞うため簪の部屋へ来訪していた。

自分はどのあたりでミスをして第を怒らせしまったか、解決するにはどうすればいいか。簪は多少融通の効かない性格だとはいえ、一夏としてはこの学園で千冬に次いで付き合いの長い親友である。

多分、最も客観的に、そして的確に自分の欠点を見抜いてくれるだろう、と一夏は考え、彼女の部屋に来たわけだ。

一夏から聞いた話を頭の中で纏めあげて、簪は一夏に説教を開始した。

「そりゃあ……織斑くんの言葉選びが悪いと、思っな」

「うっ」

「私だって、友人からいらなんって言われたら、怒るよ」

「ぐっ」

「前からそうだけど……織斑くん、相手を勘違いさせる言葉遣い、多すぎだよ……？」

「むう……返す言葉もありません……」

にべもない。そして容赦もない。簪の放つ一言一言が、全て一夏の身に染みた。

「というわけで、早くその……第さん、だったっけ？ に、謝りに

行きましょう」

「はい……ん？」

一夏が立ち上がった所で、その携帯に着信が入る。

簪に軽く会釈し、一夏は着信ボタンを押した。

「えーっと、もしもし？」

「私だ」

声の主は、この学園で一夏と付き合いの長い人物、第一位であっ

た。

「あ、千冬姉さんか。ノートPCは見つかった？」

『とつくの昔にな。それでお前、今どこにいるんだ？ 部屋にいないらしいが……』

「ああ、知り合いの 簪さんの部屋。分かる？」

『ああ、私は寮長だからな。分かった、今からそちらへ行く。その部屋から動くなよ』

これから筭を探しに行こうとした所で、なんともタイミングの悪いものである。しかし、一方的とはいえ、切られてしまったものは仕方ない。

簪に事情を説明すると、それから10秒も経たず、ドアが開いた。「千冬姉さん、ソックぐらいした方がいいんじゃない？」

「お前が、ノートPCを待つなら他になにもしないことぐらい、私は理解している」

「……さよう。ありがとうございます」

千冬からPCを受け取ると、早速一夏は電源を付ける。

「では、私はもう行くぞ。この後も仕事が溜まっているんだ」

「うん、本当にありがとう」

千冬がいなくなると、早速簪が一夏を叱咤した。

「織斑くん、早く筭さんを探しに行かないと……」

「分かっている。けど、本当なら1時間前には始めなきゃいけなかった予定が1つあるんだ。筭は俺が嫌われるだけだが、こっちは俺以外にまで迷惑がかかる」

簪は、それでも一夏の仕事を止めようとする。一夏が勘違いしていることを、筭自身が傷付く可能性を一夏が考慮できていないということを、伝えようと考えたのだ。

しかし、圧倒的な集中力を発揮している今の一夏に、簪の制止の声は届かなかった。額に脂汗を浮かべてタイピングを続ける一夏を見て、簪も止めることをやめた。

「……ああ、馬鹿。ここをそんなに密接させたら動きが鈍るだろ！

ええつと、どこが不要なんだ？ あれ、ここのパーツは絶縁体にしないと漏れるって、こないだ書いたはずなんだが……だあ、くそ！ 本当は1時間使つてのんびり仕上げる予定だったのに！」

文句を垂れながらも、一夏の作業は非常に精密だった。

しかも、企業秘密を無意識に守っているのか、独り言からでは画面のむこうで何が起きているかも分からない。

15分ほどで、一夏の動きは緩やかなものとなった。

「……後は、これを添付して、と。ふうー」

たったの15分で、一体何を作ったのだろうか？ 気になってしまった簪は、やはり筭のことを忘れて一夏に聞く。

「んーつと、とある武装の改良案 と、詳細は伏せなきゃダメだから、言えないかな。……ん？ 倉持技研からメール来てるじゃん」
今度は、簪は、『倉持技研』の単語に反応した。

つい先ほど、2人の間で話題にしたばかりの話である。

「何が……書いてある？」

「ちよつと待ってくれよ、極秘とかは教えられないから えーつと、何々……」

一夏がメール内容を確認し、そして、
絶句した。

「織斑……くん？」

簪が声を掛けると、ぎこちない動きで一夏は、顔を画面から簪へとシフトさせる。

「簪さん、……ゴメン」

「いきなり、どうしたの？」

「簪さんの専用機の開発が止まった理由……俺かも、しれない」

2 - 1 馬の尻尾は臨戦体制

入学してから、2日目の朝。一夏は、日課通りの7時半ほどに、寮の自室、廊下側のベッドで起床した。

昨日までと環境が全く違うというのに問題なく起床できるというのは、日頃から体調管理を怠らない一夏であるがゆえ、だろう。

だがしかし、自分が夢を見ていたのでなければ、昨日1日だけでも厄介ごとがいくつも起きてしまった、と彼はげんがりしていた。

まずは、一夏自身と簪の専用機についてである。

「織斑くんが原因で、私の専用機が、作られない？ …… それって、どういう、こと？」

一夏の言わんとしていることを理解しかねて、簪は尋ねた。

「……これ、見てくれ」

持っていたノートPCの画面を、ちょうど数十分前に簪が一夏に見せたときと同じように、一夏が簪に向ける。

簪の目に最初に飛び込んできたのは、『機密』の2文字だった。

「……いいの？」と簪は、思わずそう尋ねそうになった。が、情報を扱う上での分別ぐらい一夏は弁えている、と知っていたため、その質問をやめて続きの文字を読むことにした。

「ええっと……織斑くんの、専用機を……倉持技研が担当して作るってこと？」

「おおざっぱに説明すると、どうやらそういうことみたいだ。送信日時が今日の昼過ぎだったことから考えるに、多分、IS学園に入学したときのサプライズ・入学祝い！ ……みたいな感じで送ってきたんだろうな」

それで、一夏の専用機が倉持技研によって作成されるという、こ

のメールが一体どうしたのか……情報の取り扱いは簪も同じく慣れていたため、その質問を口にする前に、一夏が何を考えているのか彼女も理解した。

「ってことは、もしかして……」

「いや、もしかしなくても、だな。俺へ提供するためのISを急ピツチで作成せんとするがために、簪さんのISを作るのがすつぽかされてるんじゃないか？ って俺は思う。时期的にも、俺がISを動かせることが判明した後に国家間でゴタゴタが発生して、それから自衛のために専用機を持たせると決まって、更にどこの企業が専用機を作るかで再度ゴタゴタが発生した、と考えれば、おおよそピツタリだ」

『ゴタゴタ』のだいたいの期間を想定しながら、一夏の話をつまえて簪も頭の中で勘定を合わせる。その結果、彼女の頭も、『ゴタゴタの終着に誤差が前後一週間ほどあれど、確かに一夏の計算はあながち間違っていないであろう』と弾き出した。

簪が頭の中で計算している間に、一夏は倉持技研にメールを打ち返していた。そのメールの主立った内容は、「自分のISを最優先で行うがために、他に遅れる可能性がある仕事、および既に先送りしている仕事」の確認である。

一夏がメールを送信して、倉持技研から返信が来るまで、5分かからなかった。

おおかた、その内容を判断することで自身が受けられる仕事を確認しようとした、とでも思われたのだろう。公開して問題のなさそうな情報は、ほとんどそのメールに書かれていた。

その文章量の多さに「全く、こんなにあんのかよ」と声に出して愚痴りながら、一夏は画面をスクロールしていく。

あった。

『代表候補生1人のIS作成が、しばらく延期』の表示。これに記載されている『代表候補生』が簪であるという可能性は100パーセントでこそないだろうが、現に今簪のIS作成が延期となってい

る事実をふまえれば、その確率は限りなく100パーセントに近づく。

「俺がいきなりこの学園に入ることになったもんだから……本当に、ごめん！」

思い切り頭を下げる一夏。しかし、彼のIS作成はその彼自身があずかり知らぬ所で決められたことであるとは簪も判断できているため、むしろ慌てたのは彼女の方だった。

「そんな……顔、上げて。織斑くんが悪いんじゃないでしょ……？」

「それでもだ。俺が原因で簪さんが迷惑を被っているってことに、なんら変わりはない。俺に手伝えることがあれば言ってくれ、なんて言っておいて」

自虐を続けようとしていた一夏だが、不意にこつんと、軽い一撃が彼の頭を襲った。そこまで痛いというわけではないが、突然攻撃をされてしまった時の条件反射のようなもので、一夏は「っつ！」と呻く。

小さな握りこぶしで一夏を攻撃できた人間は、もちろんこの場には簪しかない。

「私は、これでもう、怒ったから……」
言って、にこりと簪は笑う。

どうやら彼女は本当に怒っていないらしいし、自分を攻めるつもりもないらしい。それが理解できて、一夏はある程度だが吹っ切れた。

「分かった。それじゃあ、俺の方からも、『急激な作業で完成させなくていいから、もう片方の専用機作成を優先してくれ』って進言してみるよ」

「うん、ありがと。それじゃあ……」

ノートPCを受け取る前に、一夏がしようとしていたこと。倉持技研の名前が出たゆえに一時忘れてはいたが、根本から忘れるミスを簪は犯していなかった。

「ああ。今から、箒を探してくる」
……同じく一夏も、忘れてはいなかったようだ。

寝ぼけ眼をこすりながら、一夏は窓側にある、もう片方のベッドを見る。

(やっぱり、いないか)

一夏のルームメイトにして第一の幼馴染である箒は、昨晚 正確には、昨夕だが に一夏と喧嘩をした。そのことが原因となり、今のところ2人の間には大きな溝が生まれている。

一夏は、つい昨日箒と会話した、その後の出来事を思い出す。

「その……箒さん、だっけ？ の特徴、教えて？ 私も、探すの手伝うから」

部屋を出ていこうとした一夏を止めて、箒が尋ねる。

「マジか、サンキュー！ 特徴はポニーテールと姿勢がいいのと……」

…後、制服がミニスカート。……うん、大体そんなところ、かな？」

胸が大きい……という特徴を危うく言いかけてから、慌てて別の特徴に言葉を変えた一夏。箒の方のそれが憤まじやかなので、さすがにそのサイズを言うのはデリカシーがないと判断したためである。多少つつかえた所に疑問を持ったが、それも一瞬のこと。すぐに箒は、一夏から教わった箒の特徴を頭に叩き込んだ。

「それじゃあ、俺は校舎と部活棟の方を一通り見てくる。箒さんは、寮の方を頼む！」

「うん、分かった」

一夏は、校舎に向かって全速力で駆け出す。

まず最初に、1年生のクラスを1つずつ見て回った。さすがにそこにはいないらしい。

1年生のクラスルームにいないのであれば、他の学年のクラスにいる可能性は更に低い。一夏はそちらを後回しにして、彼女が怒ったときに行つていそうな場所を 小学生の頃の記憶をどうにか思い出しながら 徹底的に探すことにした。

まず1番最初に思いついたのが、剣道場である。場所はどこだったか……持っていたノートPCを開き、学園の情報を探す。

場所はすぐに特定できたため、そちらへ直行した。

「すみません！」

声をかけながら道場の中へ入ると、ちょうど剣道部部員が今日の部活動を終わらせ、片付けをしているところだった。

「おや？ もしかして……織斑一夏君、かね？」

部員の1人が、声をかけてくる。1番最初に声をかけてきたということは、彼女が部長だろうか。

「もしかして、入部希望」

「すみません違います」

あからさまに、話し掛けてきた部員は残念そうな顔になった。しかし、一夏も今は筈を探すことで手一杯である。

「筈……あ、ええっと、去年の中学の剣道大会優勝者！ そいつつて、ここに来てませんか？」

「人探しかね？ 確かに来てほしいものだけど、残念ながら来てないよ」

今度は、一夏の方が残念そうな顔となる。ありがとうございましてと一礼して、その場を去った。

次に一夏が考えたのは、食堂である。運動量が多いから、やけ食いなんてことを筈は平気でしている可能性があった。

しかし、基本部活動のために使われるような器具やグラウンドを利用してウサ晴らしをしているという可能性も0ではない。一夏は、近い方のトレーニング場を選んだ。

……そのようにして、探すこと30分。

結局、学校中を探すこととなったが、それでも筭は見当たらなかった。後は、男子では勝手に入れない、いや入れるが入ったら変質者扱いされること請け合いの、更衣室やトイレ程度。

簪と連絡を取り合ってみるが、どうやら寮の方でも発見できなかったとのことで、一夏は驚愕する。一体どこにいるんだ？

しかし、手掛かりもなしにこれ以上探しても見つからないだろうと、一旦休むべく2人は寮の廊下で合流した。

「いない、な……」

「実は、もう部屋に戻ってる、とか……」

「可能性はあるか……けど」

簪の腹の辺りから、小さく音が鳴る。思わず簪は赤面して腹を押さえた。

「俺も、さつきから何度も鳴ってるんだよな。後は俺が探すから、夕食にしようぜ？」

空腹の魔力には勝てなかったようで、簪は赤い顔のままコクンと頷いた。

「あれー？ かんちゃんとおりむー、一緒に食べてるのー？」

2人が食事をとっていると、1人の女子がその席に近づいてきた。

「あ、のほほんさん」

「本音？ あ、織斑くんと、おんなじクラスか……」

よいしょ、と、小さく掛け声をしながら、のほほんさんと呼ばれた女子 のほとけ 布ほんね本音が席に座る。空想動物を象った部屋着の袖口からは腕が出ておらず、危なっかしい印象を周囲に振り撒いている。

「2人とも知り合いだったんだー」

「ん、まあな。昔から色々な場所で。それより、のほほんさんと簪さんこそ」

「えっとねー、私は、かんちゃんの専属メイドさんなんだよー」

専属メイド？ 頭にクエスチョンマークを浮かべる一夏に、簪が

説明する。

「更識家っていうのが、結構、大きな家で……本音の家は、その、代々うちの使用人の家計なんだ……」

「へえ、そういうの始めて聞いたぜ。……けど、のほんさんが使用人って、想像しにくいかも」

「うんうん、だよな」

「怒るところだろそこは！」

えへへ、と笑いを浮かべたままの本音を見て簪は、正確には一夏も、もはや呆れるばかりだった。

「それじゃあ、後は俺が探すよ。簪さん、色々ありがとくな」

食後、寮の廊下で一夏と簪は別れる。

そして、再び箒を探し始めようとした一夏だが、直後に頭を抱えることとなった。

何せ、もう既に箒がいそうな場所は全て探したのだ。これ以上、どこを探せばいいのか、疲れの溜まった今の一夏には皆目検討もつかなかった。

「うーん……とりあえず、一度部屋に行ってみるか。簪さんの言った通り、既に部屋に戻っている可能性も0ではないわけだし」

何より、たとえ部屋にいなかったとしても、校外に無断で出ることが禁止されている以上は部屋に戻ってくるはず。そもそもは「早く謝ろう」というのが目的で探し回っていたのだ。見つからないならば、今度は確実に謝れる方法へと切り替えるべきである。

自室に、到着した。

一応、ドアをノックする。中から返事は聞こえてこなかったため、一夏は入室した。

これが、まずかった。

つい先ほどは声をかけながらノックしたというのに、今回は気を抜いて声をかけ忘れたのだ。

その結果。

一夏がドアを開けると、ちょうど部屋でもドアが開く。そして、開いたドアとは……洗面所とシャワー室を隔てるドア。中から、湯煙と共に、

タオルを一枚身体に巻いただけの箒が、姿をあらわした。

「ほ、ほ、箒っ！ あの、ごめん！ 悪かった、まさかシャワーを浴びてたとは じゃなくて！」

咄嗟に後ろを向きながら、一夏は謝罪を開始した。

「あの、裸を見たことが悪くないとか、そういう意味ではなく……あれ、ほ、箒？」

だがしかし、箒から一夏への反応はなかった。それどころか、一夏の耳が狂っていないのであれば、彼の耳には箒の足音が聞こえた。近づく足音ではなく、遠退く足音である。

後ろ向きのまま、一夏はベッドへと歩いて行った。そして、ベッドに座る。

「ええと……裸を見るような状況になったのは、すまなかった。それと、勘違いさせたことも」

悪かった、と言おうとして、しかし一夏の口は止まる。無理もないだろう。

同じく耳に狂いがなければ、そのとき、服を着替える布擦れの音が、彼の耳には聞こえていたのだ。

一夏の心臓が思い切り高鳴る。

しかし、それも数秒のことだった。段々と冷静さを取り戻してきた一夏は、箒の行動にむしろ不審さを覚える。

先ほどから、何度か声をかけているが無視。ドアを開いた後も、思わず箒を見つめたが、箒はこちらを睨むそぶりすら見せなかった。「箒？ ごめん、返事してくれると、嬉しい」

確認で声をかけるも、箒は更に無視。そして、後ろでは布団に潜り込む音が聞こえる。

一夏は、確信した。

(……無視、されてるよな、これ)

2 - 2 憤慨淑女は意外と聡明

とりあえず。

一夏は、「とりあえず」という言葉をよく使う。

昔から、重要度の高い事項が2つも3つも同時に進行することが多いのは、彼にとってあまり喜ばしくはないジंकウスだった。そして、そういう状況に置かれるたびに、彼はそれが口癖かと思われるぐらい「とりあえず」を多用した。

問題に立ち止まっているぐらいなら、何かできることを1つでもやろう。一夏のそういう心情が、非常によく顕れている言葉だ。

昨晚だけで重要な案件が2つ、晩という縛りを除けば一週間後のクラス代表決定戦を合わせて3つ、一夏に振り掛かった。

しかし、いつまでも考えあぐねてベッドの中で狸ネイリストを続ける、というわけにもいかない。

立ち止まりそうな出来事に直面した一夏は、とりあえず、着替えて、食堂へ来ていた。

中学2年の頃まで、朝の一夏は大食漢であった。「エネルギー効率の観点からすると、朝食に最もウエイトを置き夕食の量を減らすのが最良である」という理念に従っていたためである。

しかし、「起床直後の大量摂取は、寝起きの臓器に次から次へと投石しているようなものだ、傷が付くことは間違いない」という話を小耳に挟んだ中学3年以来、朝の一夏は小食派であった。

結論として、今の一夏は小食である。どうということかといえれば、食事にあまり時間はかからないということだ。

そのため、食堂でハムエッグ、サラダ、スープ、それに白米を少量受け取った彼は、昨日の事件3つのそれぞれ当事者である3人、箒、セシリア、簪 が食堂の中にいないか、それを調べるために多少の時間を割くことができた。

10分ほど各席を探してみたが、発見はできなかった。できれば誰かと話しておきたかったが、いないのであれば仕方がない。とりあえず、一夏は他に誘われた同じクラスの数名と食事をとることにした。

「ねーねー、織斑君。食事前に外したけど、結局その眼鏡って何なの？」

「ああ、小型ディスプレイ。普通は電源がオンオフ切り替えられるんだけど、とある知り合いがスイッチをパカパカ切り替えるもんだから、電源装置を壊してつけっぱなしにしてる」

「そのおかず、どう考えてもパンの方が合うよね……」

「朝食の白米は誰にも譲れない！」

「どんどん飛び飛びになる話題にしろって一夏はついていったが、食事は迅速に済ませろ！」と1年の寮長 困ったことに、これが一夏の姉である千冬なのだ。から檄が飛んできたことが理由で、最終的に押し黙ることとなった。千冬はかなり威圧的な雰囲気醸し出していたため、他の女子からの質問もそこで止んだ。

教室。

当然だが、篠ノ之箒はそこにいた。

「あ、ええっと……箒、おはよう」

一夏はぎこちなく声をかけるが、箒は完全にスルーの体制である。ブイと顔を横に背け、顔すら見ないという状態だった。

(……あー、まあ、予想はついてたけれど……)

何度も何度も呼び掛けると、心証が悪くなるかも知れない。けれど、たった1回呼び掛けただけで席に着いては、同じく心証が悪くなるかもしれない。

こつこつ時の言葉選びが、やはり一夏は絶望的に苦手だった。この時の一夏は、時間がないためとりあえずそのまま着席することとした。

さて、今日も今日とて、一夏の授業態度は改善されていない。

まず1時間目。真耶の授業だった。

昨日のように眼鏡（ディスプレイ、が正しい）にとらめっこを続けているわけではないが、授業を聞いているわけでもなかった。千冬がその姿を見れば確実に教師の話を聞いているないと看破できたのである。真耶からすれば一夏は、『教科書を広げただひたすらノートをとり続ける、熱心な生徒』としか見えない。

そして、真耶は気の弱い　というより、慣れていないことに非常に弱い教師であった。今回の場合、真耶は男子生徒に慣れていない。そのため、一夏が本当に授業を聞いているかを確認することなど、できなかつたわけである。

そして、休憩時間。

ノートに集中していた一夏は、非常に残念なことに、休憩時間をノートとのにらめっこで終了させた。周囲に群がる女子はいっそ清々しいほどに無視して、である。

そして、授業は2時間目に入った。

「織斑」

この日初めて、授業中の一夏に声がかけられる。

「おい、織斑。返事をしろ」

声をかけていたのは、千冬であった。1時間目は用事でクラスを抜けていたようだが、2時間目の授業ではしっかり監督を務めている。

彼女は授業を聞いていないことを早速看破し、警告の意味を含めて、一夏の前に立ち名を呼んだ。

一夏は、反応しなかった。

……スパン、と、出席簿が頭に振り下ろされ、一夏は既に黒くなりかけていたノートに思い切り激突した。

「あいてて……」

「いてて、じゃない。お前は、授業を聞いたらどうだ」

「ISの基本機能の話なんて、既にタコが耳の中で子供を出産するぐらい何度も確認しています」

至って真面目に、一夏は自身の正当性を主張する。

「……なら、今教卓の上で話されていた内容を、説明してみる。それで今回限りは帳消しにしてやる」

「えっと、何の話してましたっけ。ISは元々宇宙開発を目的として作成されたため、人体保護を目的とした特異なエネルギーバリアほか生体機能の調整までしてくれる、だとか、そんな話ですよ？ それに加えて操縦者の生命維持を最優先するための絶対防御プログラムが働くだとか 確か、山田先生はブラジャーを例に挙げてましたけれど、俺が例えらしたら そうだな、自分のサポートや保護をしてくれて、いざという時には自分のことを絶対に護ってくれる……あ、俺から見た千冬姉さんみたいなもんかぐええ！」

自分が引き合いに出されるとは想像だにしていなかったのだろう、一夏はもう一度出席簿の手痛い一撃を喰らった。ノートに乗っていたペンの黒鉛が擦れて、一夏の頬を黒く彩った。

続けて、千冬が咳ばらいをする。どう見ても照れ隠しでしかないその姿に、数名の生徒がにやけ、そして千冬から『更なる照れ隠し攻撃』という二次災害をありがたく頂戴することとなった。

そして、チャイムは鳴る。

一夏は、擦れて黒ずんでしまった部分を消しゴムで必死に消していた。

「……織斑君、ノートに何書いてたの？」

「ああ、っと……企業秘密」

「あつ、反応した！ 企業秘密ってどゆこと？」

「何だその、反応するのが珍しいみたいな……」言いかけて、一夏は視線を一箇所集中させる。

時計だ。

「もしかして、この休憩時間って……2時間目と3時間目の間？」

一夏はてつきり、今が1時間目と2時間目の間だと思っていたのである。さすがの女子陣も、集中のしすぎに多少引いた。

「ま、いいや。それで、企業秘密っていうのは……バイト先に見せ

るものだから詳しい内容は教えられないよ、ってこと」

「織斑君、バイトしてるの？」

「ああ、まあね」

一夏には、両親がいない。

それゆえ、一家の大黒柱の役目を担ったのは、千冬であった。

姉に可能な限り負担はかけさせまい、と、一夏が中学のころからバイトをしていたのはそういう理由があるのだが、そこまで重い内容を聞かせるわけにもいかず、どう説明しようか一夏は迷った。迷って、とりあえず、

「自分の小遣いぐらい、自分で手に入れようと思ってたからさ」と、あながち間違ってもいない嘘で乗り切ることにした。

ウエストミンスターの鐘の音が鳴り、3時間目の授業が開始される。

「織斑」

「はいなんでございましょう、織斑先生」

休憩時間と同じく消しゴムかけをしている最中だったため、今回の一夏は、千冬からの出席簿の攻撃を喰らわずに済んだ。

振りかぶっていた出席簿を舌打ちしながら千冬は下に降ろす。

攻撃する気満々だった姉に軽くもない恐怖を一夏が覚えていると、千冬が一夏に話し掛けた。

「お前のISだが、準備に少し時間がかかりそうだ」

お前のIS？ すっかりノートに頭をシフトさせていた一夏は、一瞬だけ、千冬が何を言っているのか理解しかねた。

思考をノートから引き離し、どうにか『お前のIS』の話まで持つて行く。

「何だ、まさか、何を言っているか分からんわけではあるまい」

「……あ、ああ。もしかして専用機の話ですか」

「そつだ、お前の専用機の話だ」

専用機、という単語が耳に入り、クラス中がざわめく。

パワードスーツのISには、「コア」と呼ばれる核部分が必要不可欠。

このコアを作成することが可能な人間は、世界中を探してもISの開発者ただ1人しか存在しない。そしてなんと、開発者その人は、そのコアを467個作った時点で行方不明となった。

そして専用機とは、書いてそのまま「ある個人専用のIS」のこ

とを示す。
総じて、専用機とは非常に貴重なものなのだ。それが1年生、しかもIS初心者に充てられるとあれば、生徒のざわめきもまた当然であった。

1年生で専用機を所持しているのは、今のところ、国の看板を背負った代表候補生であるセシリアと簪（簪は、今のところ機体が未完成だが）のみだ。

だがしかし、である。

「すみません、俺の専用機の件、断らせていただけませんか？」

一夏の千冬に対するこの返答が、教室を更にどよめかせることとなった。

「織斑くん、専用機だよ？」

「断る理由なんてないんじゃないの？」

IS学園に入学した以上、専用機はそれを持たないほとんどの生徒にとつて憧れの対象である。

次々と非難の声が上がった。

「お前達、静かにしろ」

その声は千冬が止めたが、もちろん止めたのは話題を終了するた

めではなく、一夏と話すためだ。
「さて織斑。自分から専用機の誘いを蹴るんだ、何かしらまともな理由ぐらい持っているんだらうな？」

「当然です……けれど、その説明は、後でよろしいでしょうか。今

は、授業を進めてください」

「その授業を聞いていないくせに、よく言う」
ちらりと、千冬が一夏の目を見つめる。

これで「本当は戦闘が面倒臭いから」などと言いかねないような雰囲気を感じれば迷わず意見を切り捨てるどころであったが、一夏の眼から千冬が感じとったものは、むしろ強固な意志であった。

「はあ……分かった。放課後、説明しに来い。山田先生、授業の続きを」

千冬に促され、「あ、は、はい！」と、真耶は慌てて授業を再開した。しかし、一夏の専用機拒否のこともあり、その授業に集中できた生徒はほとんどいなかった。

「どういうことですか！」

午前の授業が全て終了し、昼食時間。チャイムが鳴ると同時に、セシリアは一夏の元へ憤怒の表情で駆け寄った。

「どうということ、って？」

「専用機のことですわ！ 貴方、わたくしとクラス代表決定戦を行うのですよ！？ 相手の全力には自身も全力で答えるという、あの発言は嘘だったと！？」

一夏とセシリアの周囲には、他の女子も集まっていた。周囲全員セシリアと同意見であり、状況は1日前の2時間目3時間目の休憩時間とよく似ていた。

「嘘じゃないさ」

「嘘でないなら何だと言うのです！ 自分から専用機を蹴るだなんて、わたくしがなめられているとしか思えませんわ！」

「分かった、落ち着いて」

「これが落ち着いていたら」

「いいから、落ち着け」

急に一夏の声に気迫が籠り、セシリアがたじろぐ。

大きく息を吐き出して、一夏が話を始めた。

「口調が乱暴になって悪かった。少し、俺の話聞いてくれ。……俺が今すぐに専用機を手に入れることで、被害を被る人がいるんだ」「被害……?」

「ああ、これを見てくれ」

一夏が、机の中からノートPCを取り出す。それからカーソルを操作してメールボックスを開き、昨日の倉持技研と自身のメールのやりとりをセシリアに見せた。

「見てのとおり、俺の専用機の製造が最優先になることで、他の何個もの研究所の予定が後回しになる。こんなデータを見てまで、自分の専用機が作られることを望む人間がいると、思うか?」

う、とセシリアは喉を詰まらせる。

「それで、その中にもうひとつ……これは、食事しながらできる話だから、とりあえず食堂に行こう」

これでも良心の呵責に苦しみかねない内容だというのに、まだ先があるのか。好奇心を抑え切れず、セシリアは食事に同意した。

同意が得られた一夏は、その後すぐ携帯を開いた。

「さて、じゃあ説明しようか」

食堂の4人掛け席。そこに3人が座っている。

言わずもがな一夏とセシリア、それと呼び出された簪であった。

「織斑くん……? こちらは……?」

「俺のクラスメイトでイギリス代表候補生の、セシリア・オルコットさん。あ、オルコットさん、こっちが日本代表候補生の更識簪さん。俺の幼馴染でもある」

代表候補生2人は、お互いぺこりと頭を下げる。どちらも、なぜ相手がこの場にいるのか飲み込めておらず、警戒するような目つきだった。

「さて、オルコットさん。さっき見せたメールの内容、覚えているか

な？」

「専用機を倉持技研が制作することと、それに伴いいくつかの仕事が停滞する、という話でしょうか？」

うん、と一夏は肯定し、それからもう一度ノートPCを開いた。

画面の一部が指で示され、それをセシリアが確認する。

「『専用機1機の作成の、大幅な遅延』、ですか？」

「うん、それ。簡潔に言うと、その専用機って簪さんのなんだ」「なっ……」

セシリアも、ようやく彼の言わんとすることが理解できたようだ。3つも4つも他の仕事を停滞させ見ず知らずの相手に迷惑を掛ける、それだけでなく知人にさえ損をさせてしまう。これだけ条件が揃えば、一夏の専用機辞退という話も納得がいくというものだ。

「織斑くん、それ、話しちゃっていいの……？」

「問題ない。どっちにせよ、いずれバレる話だろ？ さて、それじゃあ、更に話を進めるぜ……」

オルコットさん、放課後に、ちょっと付き合ってくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357z/>

IS書きなぐられた一夏は

2011年12月22日00時17分発行